

木宮泰彦『日本古印刷文化史』の概要

中野 直樹（編著）

はじめに

本学創立者である木宮泰彦の『日本古印刷文化史』（以下、本書という）は、木宮之彦（1985）や『国史大辞典』などで、『日華文化交流史』と共に代表作として挙げられており、木宮泰彦の著作の中でも多方面から参照されてきた著書である。

本書は昭和七年（1932）に、富山房より刊行された¹。昭和四十年（1965）に再版が²、昭和五十年（1975）に三版が出ており³、平成二十七年（2015）には、新装版が吉川弘文館から刊行された（新装版は三版を用いている⁴）。これに伴ない、今後本書の再評価も行われることと思われる。本稿では本書の概要を示した上で、本書に関連することなども若干見ていきたい⁵。

また、本稿では新装版を用いることとする。以下の構成などはこれによる（本文中の表記などはすべて通行のものにした）。

一、各篇各章の構成

本書の構成を篇章ごとに示しておく。

序文

再版序

¹ 著者は本書以外にも、『おもしろい日本歴史の話』・『日華文化交流史』・『参考日本通史』・『参考新日本史』・『日本喫茶史』・『日支文化交流一覽図と年表』を同社から出版している（木宮（1985））。また、本書は文部省の精神科学奨励金の助成を受けている（木宮（1932）・海野（1970））。本書がこの助成金を受けていることは、本書の出版に関して見逃さない点であるので指摘しておく。駒込・川村・奈須編（2011）、および文部科学省 HP「二 帝国学士院と学術研究会議」を参照のこと。なお、著者の戦時下における思想については、海野（1970）、木宮・小田（1987）・濱川（2019・2020）から窺うことができる。

² 再版に際して本文に変更は加えなかった旨、著者による序文にある。

³ 再版・三版いずれも富山房より刊行。

⁴ 新装版は三版の覆刻であるが、三版の奥付は付されていない。

⁵ 『日本古印刷文化史』の概要は、常葉大学共同研究に基づく読書会における参加者（中野直樹、濱川栄、若松大祐）の作成したレジュメおよび中野（2020）をもとに作成した。

自序

凡例

目次

第一篇 奈良時代（印刷創始期）

第一章 奈良時代の開版

第二章 我が印刷術は独創か

第二篇 平安時代（印刷興隆期）

第一章 平安時代の開版

第二章 支那版本の輸入

第三篇 鎌倉時代（和様版隆盛期）

第一章 奈良版

第二章 高野版

第三章 京洛版

第四章 入宋僧と典籍の将来

第五章 京都に於ける唐様版

第六章 鎌倉に於ける唐様版

第四篇 南北朝時代（唐様版隆盛期）

第一章 入元僧と典籍の将来

第二章 京都禪院の開版

第三章 地方禪院の開版

第四章 元の彫工と開版

第五章 武人の開版

第六章 和様版の衰勢

第五篇 室町時代（印刷衰微期）

第一章 入明僧と典籍の将来

第二章 唐様版の衰頹

第三章 和様版の衰微

第六篇 江戸時代（活字版興隆期）

第一章 活字版の伝来

第二章 勅版と官版

第三章 私版

附録古刻書題跋集

日本古刻索引
解説

このように、奈良時代から江戸時代までの日本における印刷の歴史が時代順に示されており、印刷史が通観できるようになっている。また、地方版・私版にも記述が及んでおり、印刷史が幅広く押さえられている。本文頁総数は七一七である。

二、各篇各章の概要

内容は全部で六篇の構成となっている。その内容を以下序文から、凡例・目次を除いて順に概観していきたい。

(○) 序文

本書の本文は徳富蘇峰による序文（「日本古印刷文化史に題す」）から始まる⁶。ここで徳富は印刷についての歴史を辿ることの意義を強調する（「本書は専ら印刷開版の上から、我が日本帝国文化の推移、発展、興隆の観察を試みんとしたるものである。」（p.1））。また、これまで通史として日本の印刷史を完成させた本として例を見ないとして著者木宮を賞している（「本書の如く終始一貫、脈絡相通じ、一種の文化史を作したるものは従来その例を見ず。（中略）故に日本古印刷文化史は名実兩ながら著者を其の開拓者と云わねばならぬ。」（p.3））。

徳富の序文に続いて、再版について著者の序文がある。ここでは、本書を執筆した経緯が説明されている。また、富山房より再版の申し出があったが、初版を直すことができなかつた旨、記述されている。また、著者の『日華文化交流史』にも印刷関係の記述があるので、併せて読むよう要請する。

再版序の次に初版序が存する。印刷の歴史を考究する意義について述べており、文化史という大きな枠組みの一部門として印刷史が重要な位置を占めるとする。印刷史の研究は、従来個別的な検討にとどまっていたところ、著者は国内外の典籍を見、不十分ながらその歴史を体系化したと述べる。

初版序の最後には、著者の母校である東京帝国大学の指導教官三上參次と、当時の著者の勤務先であった旧制静岡高校校長堀重里から指導・激励があり、また、三上からは題簽を徳富からは序文をもらったことが書かれている。

⁶ 著者と徳富との関係については後述する。

(4) 『日本古印刷文化史』(1932)

(一) 第一篇 奈良時代 (印刷創始期)

第一篇「奈良時代 (印刷創始期)」は、

第一章「奈良時代の開版」、

第二章「我が印刷術は独創か」、

から成る。本篇では奈良時代の印刷から記述されている。第一章では、本邦における印刷の起こりから説く。それは、『無垢浄光陀羅尼』所謂「百万塔陀羅尼」からとされるが、『日本靈異記』には、それより二十年早くに印刷が行われた可能性のある記述が見えたとする。実際のところは、『日本靈異記』に見える記述から考えると、印刷という段階には至っていなかったのではないかと著者は判断する⁷。

『無垢浄光陀羅尼』については、『続日本紀』・『東大寺要録』その他の記述を引用し、これの由来等を確認する。その他、塔基への書き込みや塔基の寸法、陀羅尼の書写者など詳しい。他に、この時代は、唐制の影響の濃い時代であることから、百万塔造立事業もこれに倣った可能性を指摘する。

また、『無垢浄光陀羅尼』の原版については従来から活字版説・木版説・銅版説があるが、諸説の長短を検討し、『無垢浄光陀羅尼』本文の字体および、当時銅印が鑄造されていた事実から、著者は銅版説をとっている⁸。

続く第二章では、本邦で広まった印刷術が独創によるものかどうかということが検討される。その際にまず唐土での印刷の起源を考察する。説としては、六朝起源説・隋唐起源説があるが、敦煌文書の刊記および、文書本文の印刷の程度から著者は唐初とみている。

結局、本邦の印刷術については、遣唐使を通して唐土から輸入した可能性を示唆する(「支那に於て開版せられた版本も含まれてゐたであらう」(p.48)・「支那版本が博多に来航した支那商船によって輸入せられたであらう」「支那に渡った僧侶によって將來せられた版本も少なくなかった。」(p.51))。遣唐使が唐土から齎した書籍の中に刊本があったことについては請求目録から確かめられる。

(二) 第二篇 平安時代 (印刷興隆期)

第二篇「平安時代 (印刷興隆期)」は、

第一章「平安時代の開版」、

⁷ 『日本靈異記』には、犯罪懺悔文の印刷についての記述がある。本文には「楷摸」とあり、これについて著者は摺衣の要領に近いものとみなし、印刷と考えるのに躊躇するとある。

⁸ 概説書などでは今も木版説と銅版説とで記述が分かれている。藤井 (1991)・川瀬 (2001) など参照。

第二章「支那版本の輸入」、

から成る。資料上からは、神護景雲四年（770）から平安中期まで刊記のはっきりした資料はないものの、所謂伝教版その他があることについて触れている。但し、筆者はそれらが平安期に確かに刊行されたものであるかどうか疑わしいとする。

奥書の古いものとして、石山寺蔵『仏説六字神呪王経』・個人蔵『法華経』（巻第二）があがっているが、刊記の最も古いものとして、聖語蔵『成唯識論』が挙げられる（後述）。この本の刊記には、寛治二年（1088）とある（本文には影印が載せられている）。

平安初期においては、天台宗と真言宗が隆盛した時期であるが、それまで印刷に関しては中断していたと著者は結論する。要するに、中国からの商船が輸入した版本や中国へ留学した僧侶が（帰国に伴い）将来した版本が、長らく中断していた日本の「開版事業に幾多の刺戟を與へ、京都にあつては、摺供養に伴ふ天台經典の開版となり、奈良にあつては、春日明神の信仰につれて、法相典籍の印刻となつて現はれたもの」ということになるのである（p.59）。

次に、摺供養と当該期の開版事業について述べられる。平安中期以降においては、經典の装飾以外に数量でも信仰心を示したことが知られる（川瀬（2001））。著者はこの点に注目し、公家の日記等に見える摺經の卷数を表にしてまとめている。この表を見ると、当該期において様々な經典が印刷されていたことが分かる。しかも、この表には施主のほか、摺供養の目的、記述の典拠も挙げられており、当時の摺經の規模も分かる。

この時期の開版事業として見逃せないのは春日版であるが、鎌倉時代にも引き続き行われる。著者は、春日版という名称の新しさや、春日版が指す範囲に幅があることに注意し、刊行時期や刊記にあまり拘らず、興福寺ならびに春日社で開版され、一定の版式を有するものは春日版としてよいとし、定義を広くとる。

春日版の中で最古のものとしては、先ほど述べた寛治二年の『成唯識論』を挙げている。春日版は刊記が刷られないことが多いが、識語の類は存在しておりこれを『寧楽刊經史』から引用列举する。

続く第二章では、まず唐土からの本の輸入について述べられる。五代から北宋にかけて、唐土では刊行される書籍の種類増加や地方における刊行事業の増加など、開版事業の活発化したことが述べられる。

続いて、本邦における唐土からの書籍の輸入のことに触れる。この時代において、唐土から商船が来朝しており様々な品がやり取りされたわけであるが、著者はこの

(4) 『日本古印刷文化史』(1932)

中に唐土から刊本が入っていた可能性が高いことを指摘する。他に、同時期の蔵書家たちは宋版を有していたことにも触れる。また、唐土からの刊本の輸入は唐土からの商船からだけでなく、本邦の僧が大陸へ行き持ち帰ったものもあるとする。この辺りの事情は著者の『日支交通史』(のち、『日華文化交流史』)に詳しく述べられている。

(三) 第三篇 鎌倉時代(和様版隆盛期)

第三篇「鎌倉時代(和様版興隆期)」は、

第一章「奈良版」、

第二章「高野版」、

第三章「京洛版」、

第四章「入宋僧と典籍の将来」、

第五章「京都に於ける唐様版」、

第六章「鎌倉に於ける唐様版」、

から成る。本書において和様版とは、唐様版(後述)とは異なる版式を有しており、本邦で刊行されたもののことを指している。

和様版として取り上げられるのは、奈良版・高野版・京洛版である。ここにいう奈良版とは、前代に興った春日版をはじめ、奈良で開版されたもののことを指しており、当該期において奈良の大寺院(興福寺・春日社・東大寺・西大寺・唐招提寺・法隆寺)において、各々の寺院で重視される典籍を中心に、特色ある刊行がなされたことを指摘する(「春日版の隆昌は、やがて南都の諸大寺を刺戟して、東大寺・西大寺・唐招提寺・法隆寺等をして、夫々開版事情に手を染めしむることゝなつた」(p.61))。

この中には、東大寺における印刷においては宋版の覆刻があること、西大寺においては書風が唐様を帯びていることなど重要な指摘がある。

次に高野版についてであるが、その名の通り高野山で開版されたものを指している。高野版は奈良版よりも開版時期が遅く、鎌倉中期以降とされ、版式等から奈良版の影響が濃いとす。本文中には、高野版の目録の本文が載せられており高野山と関係が深い密教経典が並ぶ。

高野版の開版事業に貢献したのは快賢という僧であった。そのあとを継ぐ安達泰盛と慶賢の名も挙がる。

和様版の最後は京洛版、すなわち京都において開版されたものを指す。この項目

では叡山版から記述される。鎌倉時代において、京都の貴族社会においては摺供養があり、天台宗の經典が多用されたとし、天台宗系の經典が開版されることは当然であるが、叡山版と明確に言いうるものは少ないという。

京都東寺等に蔵される叡山版の刊記について、著者の調査によれば最も古いもので弘安二年(1279)があり、最も新しいもので永仁四年(1296)となっており、足かけ十八年の事業であったことを指摘している。また、叡山版は奈良版・高野版と違い、版下が様々な人によって書かれている点が特異であると指摘する。

京洛版のうち、浄土教関連のものは奈良版・高野版と版式は同じ系統にあるものの、開版の時期は奈良版に次いで高野版に先ずるとする。当該の系統にある書名を列挙し、浄土教関連の典籍においては、刊記において版木の所在を全く明記しないなど独自の点があることにも触れられており、その理由として叡山からの圧力から逃れる為かなどとする論は興味深い。

第三篇第四章以下は、唐土からの典籍の輸入についての記述となっている(「日宋間を來往する商船が頻繁となるにつれ、我が僧侶の彼地に渡るもの多く、彼等は歸朝に際して多くの版本を齎し、これを覆刻摸刻するに至つた」(p.128))。ここから所謂唐様版の記述となる。この時期においては様々な目的をもって日宋間で人の行き来があった。本項においてはそれを踏まえる形で、本邦に輸入された諸版宋版一切經等について述べられている。

まず、宋版一切經について重源を例にしてどれほどの規模で輸入したものかなどの記述が見える。宋版一切經は開宝勅版をはじめ、系統が複雑なものを整理しており、各所に所蔵されている宋版一切經がどの版に属しているのかの情報もあって、詳細な記述となっている。

ここまでの記述は仏書中心であったが、第三篇第四章三節以降、禪籍・漢籍をはじめ、仏書以外の印刷について述べられる⁹。唐代以降五代・北宋を経て唐土では禪が盛んになっており、本邦でもその影響を受けるに至った。ここでは入宋僧が、仏書以外にも様々な典籍を二千巻以上の規模で輸入していたことを史料から指摘する(「佛教の經論章疏はいふまでもなく、禪籍・儒書・詩文集・醫書等を將來したことも少くなかつた。」(p.146))。章末には、『普門院經論章疏語録儒書等目錄』の翻刻が載せられており、当時の禪僧が仏書以外にどのような本を所蔵していたのかが分かる。

⁹ 鎌倉中期以前の邦における印刷はそもそも仏書に偏っている(川瀬(2001))、このようになるのは当然と言える。

(4) 『日本古印刷文化史』(1932)

最後の第五章では、本邦における唐様版の開版について、その先陣を切った京都泉涌寺版から述べられる。鎌倉時代には入宋する僧が多く、それらの僧の本拠地であった泉涌寺において、唐土の影響を受けた開版が行われたことを指摘する。

また、唐様版という名称についても説明される。この時期には所謂五山版があるが、著者は五山とその系統にある禅寺において開版されたものを限定して五山版とし、その他の宋・元・明版の覆刻またそれに倣ったものをも含め総括して唐様版と定義する。このように著者が定義するのは、先行研究が従来使ってきた五山版という概念では包括しにくい版本が存在するためである（その例として、博多版・大内版・薩摩版・駿河版が本文中に挙がる）。

禅僧と開版事業については、宗旨により經典類よりも高僧の語録や僧伝、詩文、韻書等が多く刊行されたことを確認する。また、宋代において禅宗と宋学との関係が深く、それを受けて本邦でも儒書の刊行があったことも指摘する。

東福寺普門院には印版屋一字（著者は版木を収蔵した倉庫が印刷所であるかとする）があったことを指摘し、寺院内部にそういった施設があることの重要性を説く。

本篇の最後は鎌倉に於ける唐様版の開版について述べられる。日宋間の交流が深まるにつれ、唐土から来朝する僧が増加した。鎌倉に来た蘭溪道隆をはじめ、道隆に勧誘された兀菴普寧などが続く。その行き来の間に、様々な文化的交流があり開版事業もその一つであったとし、鎌倉に於いても語録等が開版され、宋から来朝した僧による跋文があることから、これらの開版において宋僧による指導があったことを推測する（「宋の文化は彼等によつて續々移入せられ、我が文化の各方面に互つて甚大な影響を及ぼすことゝなつた。中にも従来南北兩京並に野山の外にその例を見なかつた開版事業が、彼等によつて新に鎌倉にも興つた」(p.197)）。

また、入宋の際に本邦の禅籍を唐土で開版し、版木を持ち帰るということもあったことが記述されている。

(四) 第四篇 南北朝時代（唐様版隆盛期）

第四篇「南北朝時代（唐様版隆盛期）」は、
第一章「入元僧と典籍の将来」、
第二章「京都禅院の開版」、
第三章「地方禅院の開版」、
第四章「元の雕工と開版」、
第五章「武人の開版」、

第六章「和様版の衰勢」、
から成る。

ここでは南北朝時代の印刷について、印刷と禅宗との関わりが述べられる¹⁰。この時期は主に日元間での貿易により、本邦には元版大蔵経や語録をはじめ種々の典籍が齎されたことを指摘し、それらの輸入は本邦での開版事業を刺激したとする。

この時期の出版に関して中心となった人物として春屋妙葩が挙げられている。また、天龍寺・建仁寺・南禅寺・東福寺等禅宗にとって中心的な寺院で各寺院に関係が深い人物による開版事業について述べられる。建仁寺版には武家の楠木正儀・佐々木氏頼から開版に際して援助があったことなど、禅僧と武家の関係を知る上で重要な指摘がある。

以上は当該期における京都での開版についてであったが、鎌倉など地方禅院における開版についても述べられている。禅僧たちは中央と地方の往来が頻繁であり、それに伴って印刷事業も地方へ伝播していったとする。

第四篇第四章では、彫工と開版の関わりが指摘される。本書において、彫工が重点的に取り上げられるのはこの章が初めてである。著者は五山版ほかの隆盛をみたのは禅宗が多方面からの帰依を得たことのほか、兪良甫はじめ優秀な彫工が多数唐土から渡来していたことを挙げている（「元の優秀なる彫工が相次いで、我が国に渡来し、我が開版事業に盡した」(p.258)・「唐様版の黄金時代は實に彼等の努力によって、現出されたものといつても過言ではあるまい。」(p.259)）。

本邦において、営利目的の出版が成立したのは近世初期のこととされるが、南北朝期にその先駆けとなる動きがあったことを著者は指摘する。これ以前は、出版が有力者からの施財あるいは、広く助縁によりなされていたが、それらに依存しない出版の形式が始まりつつあったわけである。元代に刊行された典籍の刊記には某書院・某書堂とあり、すでに営利目的の出版があったことが知られるが、本邦でもそれに倣う形で、唐土から渡来した彫工が需要のありそうな書目を刊行し、生活の資としたとする。これには、兪良甫が刊行した書目がいずれも当時歓迎された書に偏っていることが傍証として挙げられる。

ほかに、義堂周信の『空華日工集』にも営利出版をする者についての記述がみえることが報告されており、書肆の存在は未だ無いものの、出版により利益を得るも

¹⁰ 筆者は著者の未発表原稿「唐様版の研究」を常葉大学瀬名キャンパスにある歴史資料館で発見した。また、本人の自伝には五山版の研究を熱心に行っていた旨があるので、ここは特に力を入れて書いたものと思われる。未発表原稿「唐様版の研究」については、稿を改めて考察したい。

(4) 『日本古印刷文化史』(1932)

のが存在していたことが分かる。

このように、出版業態が多様化していった様子が分かるが、質の面でも様々であり、周信編集の『貞和集』をもとにした、某氏刊『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』の出来の悪さに驚いた周信が、改めて『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』を出版するなど、版權の観点などから見て重要なエピソードとなっている。

第四章末には、この時期のものと思われる唐様版の中で、刊記を欠いており出版事情が詳らかでないものの書目が列挙されており、どういったものが当該期に出版されていたのか、傾向が若干窺える。

続く第五章は、武家による開版について述べられる。武家による開版は、鎌倉時代の高野版における密教經典から始まり、南北朝期も引き続き行われた。この時期の資料として高師直の『首楞嚴義疏注経』、足利尊氏の『大般若波羅蜜多経』が挙がる。

豊後の大友貞宗などは『法華経』二千部を印刷させたとの記述が『義堂和尚語録』に見え、大部の印刷も行っていたことが分かり、武家による印刷事業の勢いが窺える(但し、この二千部の所在は不明とのこと)。

南北朝期において、異彩を放つ印刷物として儒書が挙げられており、正平版『論語』について考察が行われる。正平版『論語』には三種の版本があるが(単跋本・二跋本・無跋本)、その刊行順については諸説ある。本文中では、島田翰が『古文旧書考』で、刊記を削った版本があることと、二跋本にしかない文が、正平年間よりも前に刊行された元亨版古文尚書他にもあることから、出版の順番は二、単、無であろうと推察したことを紹介し、著者もそれに従う。

第四篇最後の六章では、和様版の衰退について述べられる。南北朝期は著者によれば、唐様版の全盛期であった。とはいえ、和様版のなかでも春日版は南北朝期の版本が興福寺に残存していることから当該期に至ってもよく摺られたことが言われる(但し、この期の版本の残りはよくないとする)。

本文中には春日版『法華経』が挙げられ、刊記および『興福寺年代記』から、約百年の間に同じ願主によって十五度の開版があったことが知られる(同じ願主が百年以上生きることは考えにくいので、願主の意思を周囲の人が継いだものとみられる)。こういった、開版のありかたなども印刷史上見逃せない。

(五) 第五篇 室町時代(印刷衰微期)

第五篇「室町時代(印刷衰微期)」は、

第2部 主要論著の概要

第一章「入明僧と典籍の将来」、

第二章「唐様版の衰頹」、

第三章「和様版の衰微」、

から成る。この時期に行われた日明貿易における諸品の中には、数多くの書籍がふくまれていたことを指摘し、輸入された典籍により諸学が刺激され、開版事業の発達を促したと推測する。

この時期に輸入されたのは明版であるが、高麗版の輸入もあった（「朝鮮との交通が頻繁となり、麗版大藏經を輸入する」(p.325)）。特に、高麗版の輸入は南北朝以後室町期になってからのことというのは重要な指摘である。

応仁の乱後は、京都での開版事業も振るわなくなり、地方での事業が目立ってくる。それとともに、刊行される書目は禅籍よりも儒書・字書の類が増加するとし、政治の変遷が開版にも影響を与えることを指摘する。

また、この期において寺院以外で唐様版の開版事業が大いに展開したことが述べられる。このことは、五山が独占していた学問が外に解放されつつあった出来事として著者は注目している。

唐様版が全体として衰退傾向にある中で、京洛版を除いて和様版も同じく衰退の傾向を見せる。とはいえ、前代に引き続き春日版は『大般若経』を中心にして、開版が変わらず続けられたことを、興福寺に蔵せられている版木の刊記から指摘する。また、版木の一部が失われた時には、版木が追加された例も挙げる。

京洛版においては、浄土教に関する典籍の刊行が盛んであった。著者は、この期における浄土教の発展を反映したものと考える。他に、東寺での開版にも触れられる。

和様版の中には、書体が唐様版と似たように見えるものがあり、その刊記は五山とのつながりを示すので、唐様版からの影響があった可能性を指摘する。

この時期の京洛版においては、前代に引き続き平仮名交じりの典籍が刊行されており（『三部仮名抄』）、さらに振り仮名付きの典籍（『正信偈三帖和讃』）の出版も行われるなど、浄土教関係者による教化の努力の跡を見、文化普及の観点から注目される。

（六）第六篇 江戸時代（活字版興隆期）

第六篇「江戸時代（活字版興隆期）」は、第一章「活字版の伝来」、

第二章「勅版と官版」、

第三章「私版」、

から成る。応仁の乱後は目立った開版は無かったものの、秀吉が一旦は全国統一を果たし、その後江戸時代に入ると、開版は再び発展した。この期に、朝鮮半島経由で活字が伝えられたことは印刷史上大きな出来事である¹¹。

本篇においては、北宋に膠泥活字があったこと、その後は元代まで活字が振るわず、明代以降に再び活字が用いられたことを諸史料から示す。清代においても同様であり、勅版にも活字が用いられた。ただその活字は、武英殿にあったものの盗難により年々その数を減らし、発覚を恐れた臣に帝が唆され鑄つぶしたという。同時に於ける活字の扱いについての重要な記述である。

朝鮮の活字については、李氏朝鮮における状況を諸史料の跋文によって示している。このころ朝鮮で刊行された典籍が本邦にも残存していること、朝鮮版には銅活字以外に、鉄活字や陶活字があったことなども指摘される。

以上のように、東アジアの印刷文化を概説したうえで、本邦の印刷の状況を見ていく。本邦に活字が伝来したのは室町期であり、朝鮮出兵に関する戦利品によって、また宣教師によって齎されたということである。それ以前に活字が伝わらなかった理由として、入明僧が外交上諸事に忙しく、活字に目を付けられなかった可能性などを説いている。

本邦への活字技術の伝来については、後陽成天皇勅版の『勸学文』・『錦繡緞』の跋文等を引き、当時から活字は朝鮮から来たものという認識があったことを示している。印刷に関する意識が窺え、貴重な記述である。

次に、所謂キリシタン版についてであるが、ヴァリニャーノが日本に西洋式活字印刷機を持ち込んだことが述べられる。但し、西洋の活字版が本邦の印刷史に及ぼした影響が少ないということで、記述は甚だ簡単である¹²。

本篇では、勅版・官版・私版について詳しく述べられる。室町後期には勅版として後陽成天皇に係る『日本書紀』・四書等の刊行があったことが指摘される。また、後水尾天皇に係る勅版としては、『皇宋事宝類苑』が挙げられる。

官版としては、伏見版・駿府版が挙げられる。伏見版として『孔子家語』が挙げ

¹¹ 活字が朝鮮半島から伝えられたかについては諸説あるが、今本文の通りしておく。

¹² キリシタン版の研究は『日葡辞書』の新出本の発見など、近年目覚ましい発展を遂げている。ここでは、関連書として『日本語活字印刷史』・『キリシタンと出版』の二書をまず挙げておきたい。Web上でも、大英図書館蔵天草版『平家物語』・同『伊曾保物語』・同『金句集』が国立国語研究所によりカラーで公開されている。

第2部 主要論著の概要

られ、これの刊行に先立って勅版が盛んに刊行されていたので、その刺激によるものかとする。『孔子家語』のほか、伏見版の書目が列挙される。

駿府版としては、『大蔵一覽集』・『群書治要』が挙げられる。この二書については林道春と金地院崇伝が刊行に大きく関わっていることを諸史料から指摘する。特に『群書治要』刊行に際しては法度が定められ、勤務時間の制定や知人の見物の禁止など当時の事情が窺われ興味深い。

次に私版であるが、その先駆けとして文禄五年(1596)版『補註蒙求』・慶長二年(1597)版易林本『節用集』が挙げられる¹³。他に、饅頭屋本『節用集』について、その著者について考察する。

この時代においては、天台宗・日蓮宗の寺院において開版された典籍があったことに触れ、特に京都の要法寺版(直江版)の開版場所・開版者について『羅山文集』や『右文故事』から説明する¹⁴。

次に、要法寺以外の京都における諸寺の私版についてであるが、大光山本国寺や比叡山延暦寺、真言宗では清和院における開版など、少なくなかったことが指摘される。

また、活字版の大蔵経の企画があったことも重要である。この企画は伊勢常明寺の聖乗坊宗存という僧のものであったが、どこまで事業が進んだものか不明となっている。

このほか、奈良や高野山でも活字版による印刷事業が行われたことが指摘される。奈良における活字版の刊行は振るわなかったらしく、現存する典籍もわずかであることが言われる。一方の高野山においては、活字版が活発に刊行されたとし、主に密教関係の書目が列挙される。なお、当時の活字が高野山西禅院に収蔵されているとのことであり、活字の扱いについての重要な記述となっている¹⁵。

最後は嵯峨本について述べられる。ここではまず、慶長から元和にかけて平仮名・片仮名を交えた文学関係の刊行が盛んになったことが指摘される¹⁶。その中でも嵯

¹³ 易林については本文中でも先行研究が紹介されるが、森末(1936)「易林本節用集改訂者易林に就いて」『国語と国文学』(13・9)・北(1975)「易林と夢梅」『国語学』(103)に詳しい。

¹⁴ 本書の要法寺版の記述については新村出の「要法寺版の研究」(『典籍叢談』所収)に基づくところが多い旨、本文にて断られている。

¹⁵ 本書の四一七頁には、後水尾天皇勅版の活字が加茂の祭の出鉾の下のおもりとして使われたという伝承が紹介されている。この伝承の信ぴょう性はともかく、活字の扱いにも様々あったものと想像される。

¹⁶ 鈴木広光「制約から見えてくるもの—嵯峨本のタイポグラフィ」(『文字のデザイン・書体のフシギ』所収)に、嵯峨本の組版や文字遣い等について興味深い考察がある。

(4) 『日本古印刷文化史』(1932)

峨本は良質の料紙や挿絵の優美さなど装幀の豪華さで知られる。嵯峨本は定義によって認定される書目に違いがあるが、世に嵯峨本と言われている典籍を『辨疑書目録』等から列挙する。

和田維四郎「嵯峨本考」からも書目の引用があり、版下を誰が書いたのかということとその装幀から、嵯峨本を「光悦本」・「嵯峨本」・「嵯峨本類似書」・「嵯峨本でないもの」に分ける見方を紹介する。著者は和田の見方を全面的には支持せず、書風・装幀・出版時期から嵯峨本を定義すべきとの立場を取る。

また、従来は嵯峨本の殆どが整版であると考えられていたものの、実際は活字版が多いことを注意している。

(七) 附録

附録は、古刻書題跋集(全五百八十八文)と索引である。題跋集については、本文の注にも参照指示がありこれを見合わせるにより、刊行の経緯等がよく分かるので印刷史をより幅広くとらえることができる¹⁷。

三、本書に関連して

本書は、著者が旧制静岡高校に赴任直後に東京へ内地留学をした際に集めた資料により完成したものである。著者はこの機を利用して東西の文庫を訪ねている(木宮・小田(1987))。本書は書誌的事項や刊行に関わる事績について様々な典籍を縦横に利用し実証しており、本書凡例にもある通り様々な本を実現することができたこの機会を活かした記述となっている。

本書の標題は先を述べたように三上參次、序文は徳富蘇峰による。三上は、著者の東京帝国大学国史科時代の指導教官である。徳富と著者とは、昭和六年に著者が本書の執筆をしていたころ、有坂忠平に紹介され関係が始まった(旧制静岡高校時代の教え子に有坂弘という学生がおり、その父忠平は徳富蘇峰と親交があった。著者は忠平の紹介で成篁堂文庫所蔵の貴重書の閲覧をしたり、徳富来静の際に講演依頼をしたりするなど、浅からぬ縁があった(木宮(1937)、木宮・小田(同))。

さて、本書の序文で蘇峰は本書のカバーする範囲を評価する一方で、書誌等の誤

¹⁷ 奥書・識語類を集成乃至注釈したものに、『上代写経識語注釈』・『点本書目』・「加点識語集覧」(『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究』(8)所収)などがある。これらは写経に関するものが中心であるが、本書に集成された印刷に関する刊記と合わせて見ていくことで、それぞれの世界の特徴が浮かび上がってくるものと期待される。

りについて指摘している。これは、すぐあとに述べるように、長澤によっても注意があるところである。

本書の初版が出版されてから今年で八十八年が経っており、再版されたときに本文に手を加えていないこともあって、書誌の誤り以外にそもそも記述が部分的に古くなっている¹⁸。学界からの本書についての評価については、木宮（1985）に詳しく纏められている。例えば、長澤規矩也の『和漢書の印刷とその歴史』にある重要参考文献の一覧にも本書が挙げられている。そこには、印刷を文化史としてとらえた見方を評価する一方で、書誌学的記述の誤りが指摘される¹⁹。

また、当時あっては今より引用に関しておおらかであったのであろうが、先行研究の引用の仕方に今の目から見て危うさがある。例えば、本書三〇一頁から三〇四頁にかけて、島田翰の『古文舊書考』が引用されている。しかし、この箇所を『古文舊書考』と実際に比較したところ、著者の記述なのか島田の記述なのか、かなり判断しにくい書き方がされている（一応典拠は書かれているが、先行説と自説との境界が分からない）。本書の記述を著者の説であると思って引用すると、思わぬ形でプライオリティを侵害する虞があるので気を付けたい²⁰。

もう一点付け加えておく。本書は、木宮（1985）によれば、木宮泰彦の著書『日支交通史』の副産物であるという（本書の注にもしばしば『日支交通史』の某頁を参照せよとある）。このように、本書は中国との関わりを重点的に書いたものであるから、所謂キリシタン版に関する記述が非常に乏しいというのは、仕方がないことかもしれない。ただ、折角奈良時代から江戸時代までの印刷の歴史を海外との関わりを含めて押さえられている本書であるだけに、キリシタン版のことなどももう少し盛り込まれていたならばと思うのである。

本書の紹介には西本（1932）と吉田（1932）がある。今回の新装版の末に付された上田純一²¹による解説（上田（2015））は、日中その他の交流をふまえた印刷史が本書において展開されている点を強調する。

¹⁸ 例えば、宋版一切経の所蔵先など、現在は本書の記述より多くの場所が見つかっている。

¹⁹ 本書に列挙される書名などに疑問点は確かにあった。例えば、本書九五頁『秘密寶鑰』は、『秘密寶鑰』の誤植ともとれるが、著者の見た本の外題或いは内題がこうだった、若しくは、引用元の書籍がこのように書いていた可能性もあり軽々に判断できない。

²⁰ 島田翰の書誌記述にも気を付けなければならないことは広く知られているが、本書三〇三頁にも「島田氏はまゝ虚構の説をなして居るから遽に信用し難い。」という記述があり、当時の島田への認識の一端を窺わしめる。島田については、杜・王（2014）に事績が解説されている。

²¹ 上田純一（1950-）熊本県熊本市出身。京都府立大学文学部卒業、九州大学大学院文学研究科単位取得退学。九州大学文学博士。九州大学文学部助手、京都府立大学文学部歴史学科教授。2016年定年退職、現在は同大学特任教授。

(4) 『日本古印刷文化史』(1932)

また、木宮の著作の中には「禅と印刷」という論文があるが(木宮(1941))、これは本書の中で中世の印刷に関係する箇所を摘記したものである(木宮(1985))²²。

以上、本書の内容およびその周辺のことなどをごく簡単に整理してきた。本書は先学が指摘する通り、内容に若干の修正が必要なところもあるが、印刷史として時代順に記述が並んでおり読みやすく、本邦における印刷の歴史の流れがよく分かる。単に印刷関連の記述や書誌情報を列挙するのではなく、なぜそのような印刷が行われたのか、なぜそのような版式となったのかなど、歴史的背景が踏まえられた記述が随所に見える。これには著者の専門分野の知識が動員されており、大変面白く読める。

本書二八〇頁には、南北朝期に印刷された『大般若経』の刊記についての記述があるが、『日本古刻書史』が刊記を摘記・入れ替えし、足利義詮と如春が印刷させたかのような記述になっていることを指摘し(実際は刊記に続きがあり、足利基氏が印刷させたものと考えられる)、刊記全文を載せていることなど、著者が可能な限り原本に当たっているからこそできる仕事である。刊記や奥書を載せる研究書は他にいくつもがあるが、摘記の可能性が拭えず、引用には不安を覚えることがしばしばある。原文にできるだけ忠実にあろうとする著者の姿勢を支持したい。

以上、本書に記述された内容をすべて取り上げることはできなかったが、本書に関わる点をいくつか述べた。新装版が今後ますます多くの人に読まれることを希望する。

[参考文献]

- 上田純一(2015)「解説」木宮泰彦著『日本古印刷文化史 新装版』吉川弘文館
海野泰男(1970)「年譜」福原龍蔵代表編集『八十年の生涯 木宮泰彦自伝と追憶』
八十年の生涯木宮泰彦自伝と追憶刊行会
川瀬一馬(2001)『書誌学入門』雄松堂出版
木宮栄彦・小田久夫(1987)『木宮泰彦 その生涯と業績』創立者生誕一〇〇年記念委員会
木宮泰彦(1932:初版)『日本古印刷文化史』富山房
——(1937)「思ひ出の数々」有坂弘編『有坂忠平』有坂弘

²² 筆者が本書と比較したところ、木宮(1985)の指摘通り、本書に合わせて新規の記述は行われなかったと見られる。但し、若干の誤植訂正が行われている。例えば、本書二六二頁に「元末」とあるが、この論文では「元末」に直されている。

第2部 主要論著の概要

- (1941)「禅と印刷」『禅』(2) 雄山閣
- (1965:再版)『日本古印刷文化史』富山房
- (1975:三版)『日本古印刷文化史』富山房
- (2015:新装版)『日本古印刷文化史』吉川弘文館
- 木宮之彦 (1985)『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』静岡谷島屋
- 駒込武・川村肇・奈須恵子編 (2011)『戦時下学問の統制と動員』東京大学出版会
- 中野直樹 (2020)「〈書評〉木宮泰彦著『日本古印刷文化史』(新装版)」『常葉国文』
(35) 常葉大学短期大学部日本語日本文学会
- 長澤規矩也 (1952)『和漢書の印刷とその歴史』吉川弘文館
- 西本 (1932)「〈書評〉日本古印刷文化史」『龍谷史壇』(10) 龍谷大学
- 濱川栄 (2019)「木宮泰彦と皇国史観—主として『日華文化交流史』に拠る—」『常葉初等教育研究』(4) 常葉大学教育学部初等教育課程
- (2020)「『日華文化交流史』に見る歴史学者・木宮泰彦の姿:『日華文化交流史』とその時代(1)」『常葉大学外国語学部紀要』(36) 常葉大学外国語学部
- 藤井隆 (1991)『日本古典書誌学総説』和泉書院
- 吉田 (1932)「〈紹介〉日本古印刷文化史」『史林』(17-2) 史学研究会
- 杜澤遜・王曉娟点校 (2014) 島田翰著『古文舊書考』上海古籍出版社(日藏中国古籍書志)